

米国オリンピック国立公園 自然観察ハイキング

2006年7~8月 with シリウス (個人) 6人

日本よりは涼しいとはいえ日中は猛暑のヒートアイランドであるシアトルからバスで4時間、海と山と湖の小さな港町ポート・エンジェルスは朝夕は薄手ダウンパーカーが欲しいくらいの冷涼で爽やかな気候であった。この町はワシントン州最北西部オリンピック半島の北海岸中央部にあり、ファンデフカ海峡を挟んだ目と鼻の先はカナダのバンクーバー島である。ポート・エンジェルスのダウンタウンは海岸に貼り付いているような狭い街であるが、山側の丘陵地にはゆったりとした住宅街が拡がりそのすぐ奥には今回の我々の目的地、オリンピック山塊のジャンダルムが深い雲に覆われて聳えていた。主要産業は林産、水産、観光。人口約2万人の小さいが美しい港町であった。以下、写真で街の様子を点描を。



(ポート・エンジェルス 対岸はカナダ)





(後方の山々は今回ハイクしたオリンピック山塊のハリケー・リッジく写真は初夏のシーズンの物>)



右側奥がポートエンジェルス公共埠頭とダウンタウン。左の長大な砂嘴はEdiz Hook。
手前左の煙突は当地の木材を利用したパルプ工場（日本の製紙会社が指導しているとか・・・）

暮れなずむ公共埠頭のプロムナード
デッキと展望台。納涼魚釣りをしていた。

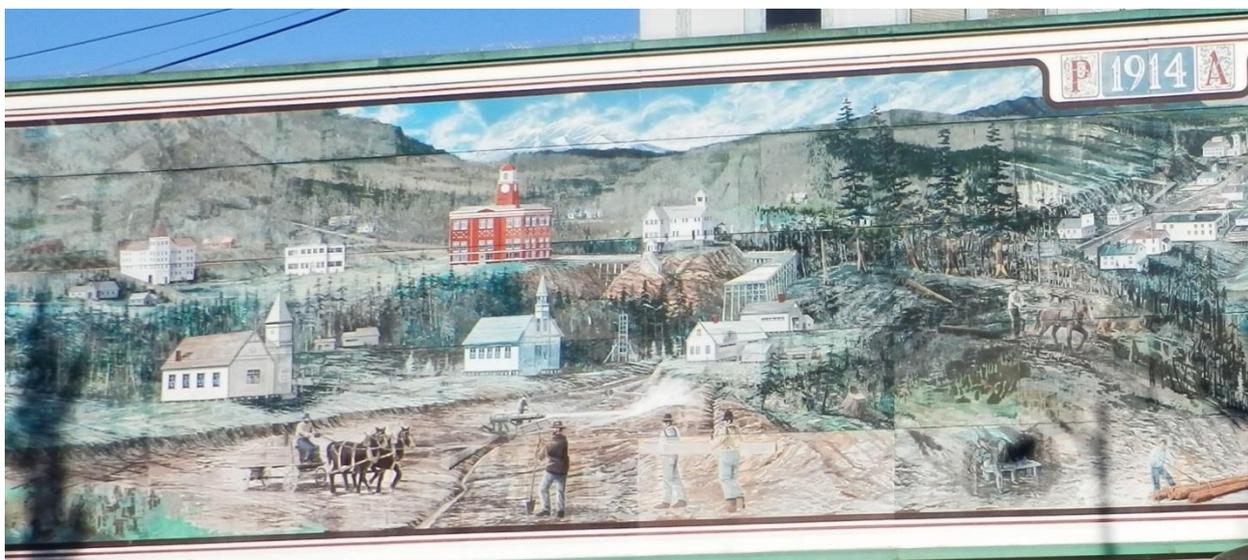


ダウンタウンに夕闇が迫った。この Crab House にカニとハマグリのお海鮮料理を喰いに行った。

以下、街中で見かけた巨大な壁画を2枚。これは想像上のフェリーか？それとも実際にあったものか？



以下の2枚は、この町の開墾と建設の様子を描いたもの（絵は上右端から下左端へと続く、100年前）。



さて。どちらかと言えばハードなマウント・レーニアが終わった後に、フルバ師匠は第2弾としての優雅なハイキングを用意してくれていた。ワシントン州随一の風光明媚なオリンピック半島での3日間のハイキングであった。因みに、ワシントン州には、マウント・レーニア、ノース・カスケード、それにこのオリンピックの3つの国立公園があるが、その中でも一番人気が高いのがこのオリンピック国立公園だそうで、年間入園者数も他の二つに比べて桁違いに多い（年間約3百万人）。

こちらはバスなどの公共交通機関が殆ど無いので、タコマでレンタカーを返した我々には足が無い。丁度良い塩梅にフルバさんがネットで手頃な現地の車付のガイドを予約してくれていて、彼女の車に毎朝ピックアップして貰えば、景勝のハイキングコースや観光地を毎日案内してくれると言う寸法。全くの大名旅行。レーニアやシアトルでは我々の仲間が転がすレンタカーで道を探しながら行かねばならず、運転者は勿論のこと同乗者も疲れたものだったが、こちらではガイドが運転する車に乗ってうたた寝でもしていれば、3～4時間で目的地に連れて行って貰えるという寸法。彼女が運転しながら案内してくれる英語の説明も左の耳から右の耳へ抜ける子守唄という塩梅。

彼女は、ナチュラルリストの資格を持ったガイドで、個人で小さなツアー会社を経営している。なかなか素晴らしいガイドであったので、今後この方面へガイドハイクをされる方は、彼女の会社に依頼されるとよい。

名前は Ms.Carolyn Wilcox。“ネエちゃん”と呼ぶには妙齢を若干過ぎていないかもしれないが、活発でキュートな顔立ちの美人であったので、以降は Carolyn ネエちゃんと呼ぶことにする。ご参考までにネエちゃんの会社名や URL を稿末に付記した。

以下、日程順にハイキングの様子を記す。
下記の地図で今回歩いたトレイルの位置を①などで示した。
また、各トレイルの情報は稿末に付記した。



今回歩いたオリンピック半島の地域

(オリンピック半島。
オリンピック国立公園は
濃く塗られた地域 ⇒)



《①》Hoh Rain Forest (Hall of Mosses Trail)

さて、オリンピック国立公園での初日。朝8時にポートエンジェルスでピックアップして貰って、国道101号を一路西へ。途中には、琵琶湖と浜名湖を足して2で割った大きさの風光明媚なクレセント湖（三日月湖）が山々の深い影を映し、また道路脇にはナントカ松などの大木が鬱蒼と茂っていて、如何にも森と湖のアメリカの原生林という趣が深かった。ワシントン州の愛称が Evergreen State であることも頷ける。アメリカの原野には砂漠や岩だらけの荒野が多いが、ここは全て緑の樹海であった。

本日の行先はオリンピック半島の中央部に位置するホー・レイン・フォレストと呼ばれる温帯雨林のハイキングである。この温帯雨林は、暖冬・冷夏・多雨というこの地の気候がもたらしたもので、この巨大な針葉樹林は世界の温帯雨林の中でも典型的なものだそう。Carolyn ネエちゃんは動植物が専門のナチュラルリストであるから、樹木や草花の名前や同じ針葉樹でも僅かに違う異種の区別などを説明してくれたが、その方面に全く無知の小生には猫に小判であった。この温帯雨林ハイキングの目玉は、天を突くような針葉樹の巨樹が鬱蒼と茂り、その世代交代の様子が至る所に見られることであろう。即ち、堂々と枝を拡げて今を盛りの壮年期の巨樹の足元には今は朽果てた爺さん世代の巨木が横たわっていて、その背中からは孫の世代の若い芽が芽吹いているのが観察できる。ここの樹木の樹齢は500年程度であるそうだから、祖父母から孫までの3世代の1500年間程度の世代交代と森林の更新再生の様子が如実に観察できるのである。5、6本の巨木が直線上に綺麗に並んで生えているという奇

妙な(?) 生え方は、倒れて横たわった爺さんの大木の上に着床した何人かの孫が爺さんの栄養分を貰って成長した姿であろう。爺さんを nurselog とか、nursebed というそうだ。乳母の意。

また、ここのもう一つの名物は樹木に垂れ下がった苔(サルオガセに似た苔)である。ここのトレイルの一つに“Hall of Mosses Trail”(苔の回廊)というのがあり、我々もこのコースを歩いた。

看板によればこのようなハイクは、“Trail of Senses Interpretive Hike”と呼ばれ、心を澄まして全身を五感にすれば、植物や動物が織りなす森の生態の息吹を野生動物や鮭と同じように感じることができるので、あなたも太古の昔の“動物”に戻った感覚を体験してみたいと書かれていた。



WELCOME TO THE ELK CREEK CONSERVATION AREA

Trail of Senses Interpretive Hike

YOU ARE HERE

- Elk Creek Conservation Area
- Trail of Senses
- ◆ Forest Transition Sign
- ◆ The Sisters Sign
- ◆ Salmon Vitality Sign
- ◆ Travel Corridor Sign

Our sense of touch, hearing, sight, and smell are dependent on one another, just like salmon, wildlife, humans, and the old growth forest ecosystem are dependent on one another.

As you hike this trail, clear your mind and pay attention to everything you touch, hear, see, and smell.

There are interpretive signs along the way to guide you.

IF THIS INTERPRETIVE TRAIL INSPIRES YOU GET INVOLVED!

Contact North Olympic Land Trust to find out how you can volunteer: 360-417-1815 • www.northolympiclandtrust.org

2016/07/30



nurselog 上に一列に並んで生えている孫樹



樹に垂れ下がっているサルオガセ

《②》Cape Flattery

昨日は山中の溪谷ハイキングであったが、2日目の本日は趣を変えて海のハイクと洒落こんだ。オリンピック半島の最北西部の岬はフラッター岬と呼ばれ、ここでファンデフカ海峡が太平洋に出る。この岬は、オリンピック半島の最北西部であるばかりでなく、米国本土の最北西ポイントでもあった。

海洋性の針葉樹が鬱蒼と茂った深い森林を抜けると、岬の断崖絶壁に出た。海蝕によって浸食された岩の絶壁や海蝕洞窟が足下に見え、その上に乗り出すように展望台の木柵が危うく乗っかっている。足を踏み外せば、白波が砕け散っている千尋の岩礁へお陀仏間違いなし。How fearful! Oh my God.



足下の断崖絶壁。How fearful! Oh my God.

対岸はカナダのバンクーバー島

足下の先に横たわっている小島には、米国で最初に設置された灯台が見えた。Carolyn ネエちゃんが望遠鏡を島に向けて何やら目標を探している。トド10頭くらいが寝ころんで日光浴をしているのをレ

レンズの向こうに見つけた。トドのハーレムだという。トドだけではなくクジラも遊泳しているそうだが、本日は現れなかった。鳥は海鵜が断崖絶壁に巣を作っていて、白い糞が積み重なっているの、直ぐに探せた。何百羽という黒い鵜が屯していた。



海蝕洞窟 白色は鵜の糞



足下に浮かぶ Tatoosh Island 。灯台は米国で第 1 号設置灯台、自動化されているが今も現役。



岩礁にはトドのハーレムが見えた



Carolyn ネエちゃんは色々な食べ物を用意してくれていた

このフラッター岬一帯は、鯨やアシカや鮭や鳥を狩猟して生活していたネイティブアメリカンが太古の昔から住んでいた地域で、今はインディアン保護居住地域に指定されている。岬の入り口に Makah Museum/Cultural and Research Center という博物館があり、彼らの伝統文化が展示されていた。



右＝博物館入口

下左＝博物館にあった彼等のモチーフ。

下に鯨、上は鷲、両横は？

下右＝付近の海浜休憩所の柱に刻まれていたモチーフ。Hobuck Beach



《③》Hurricane Ridge

さて、初日、2日目は山とはあまり関係ない場所でのハイキングであったが、最終日はいよいよ今回のメインイベント、オリンピック山塊に分け入る日となった。“分け入る”と言っても、本日の午後はタコマに帰らなくては行けないので、使える時間は午前中のみ。よって、Carolyn ネエちゃんはオリンピック山脈の好展望台として知られているポート・エンジェルス裏山、ハリケーン・リッジのビクターセンターからハリケーン・ヒル 1755m 頂上までのトレイルを選んでくれた。

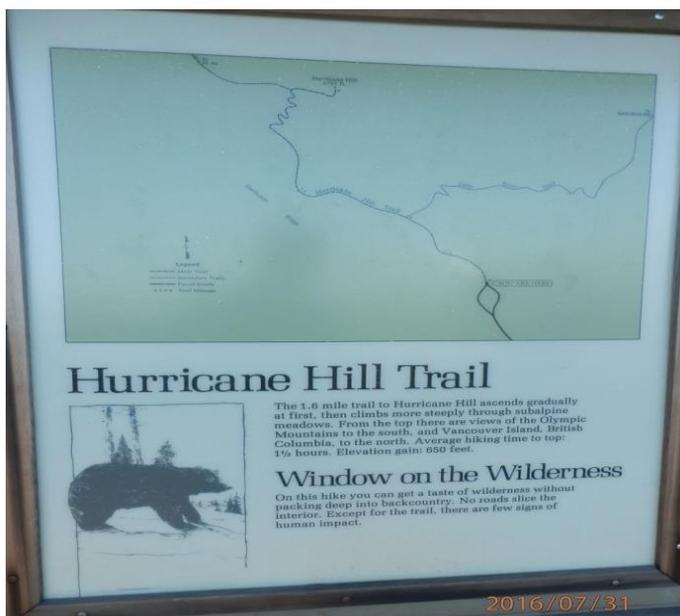
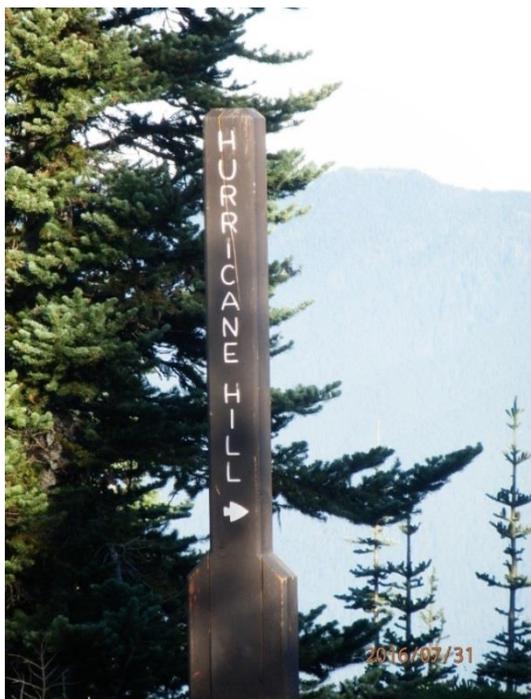
早朝6時半にピックアップ。車はポート・エンジェルス丘陵住宅地を抜けて、ウネウネと曲がりくねった山道に入った。

ポート・エンジェルス の裏山と言っても、ハリケーン・リッジのビジターセンターまで2時間ほど掛かった。

ここから、ハリケーン・ヒル 1755m 頂上まで約 3km、標高差 200m を登るのである。標高差はたったの 200m ではあるが、トレイル最初の部分は急坂で、Carolyn ネエちゃんの元気で大きなコンパスにはダックスフントの我々日本人は付いて行けず息が弾んだ。



(ポート・エンジェルスの港から見たハリケーン・リッジ)



登るにつれて展望が開け、オリンピック・マウンテンの盟主オリンパス山 2432m や、その東側に連なるオリンピック・ウィルダネスの連嶺などが手に取るように眺められた。標高は左程でもないが、雪を冠った奥山連山のどっしりとしてかつ巍峨たる山巔は流石アメリカと思わせるに充分だった。

オリンピック山塊にも奥深くまで登山ルートが付いているが、これらの山に登るには相当の日数と衣食住の装備を要するだろう。また氷河もあるので、ロープなどのギア類も必要になるだろう。さすれば、ザックの重量はマウント・レニアの場合を越えるかもしれず、何れにしても私などはお呼びではなからう。今回の我々はこれらの山々を望遠するだけであった。



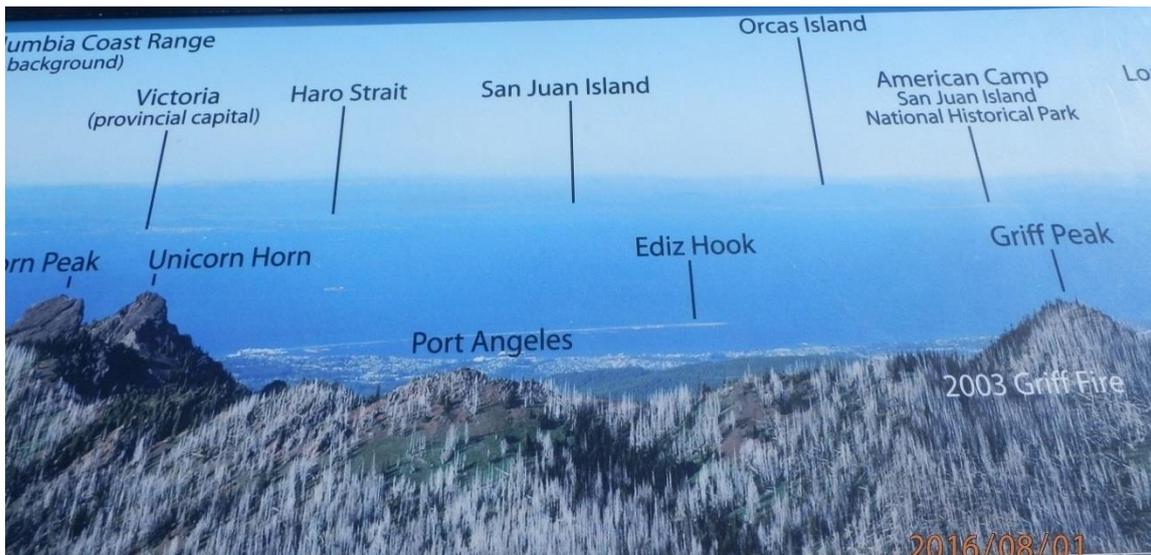
(オリンピック山塊 中央右端が盟主オリンパス山 2432m)



ハリケーン・ヒルのトレイルとお花畑

道々、Carolyn ネエちゃんは立ち止まって望遠鏡をどこかに合わせているが、そこには必ず動物が居た。我々の目には全く見えないが、ナチュラルリストのネエちゃんにはちゃんと見えているらしい。草花も珍しいようなものが沢山あって、女性陣は喜んで写真を撮っていた。

ハリケー・ヒルの頂上からは、南側のオリンピック山塊と同時に、逆方向の北側のポー・エンジェルスやフアンデフカ海峡、対岸のカナダの山々も見えた。頂上の岩に座って軽食休憩。足元をリスが何匹も走り廻っていた。足下のお花畑ではマーモットが朝食の最中であつた。何かの花を喰っているらしいが、時々立ち上がって回りを見渡していた。



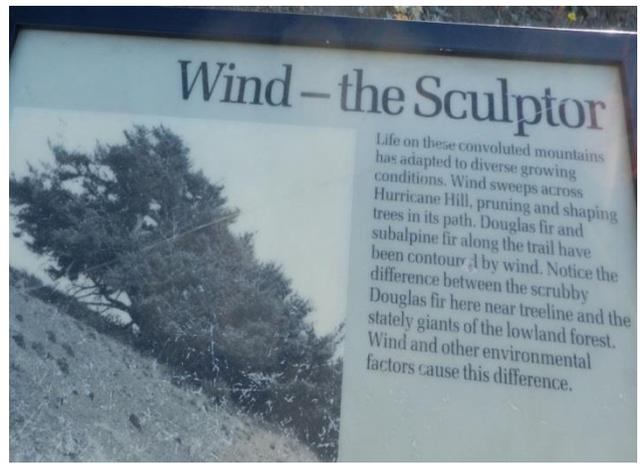
看板によれば、ハリケーン・ヒルの頂上からは北側のポート・エンジェルスやカナダのコロンビア海岸も見えるようである。縞枯れは2003年の山火事による。



ハリケーン・ヒルで出会った動物達
写真以外に、野兎、雷鳥、鷺、種々の小鳥などが暮らしている

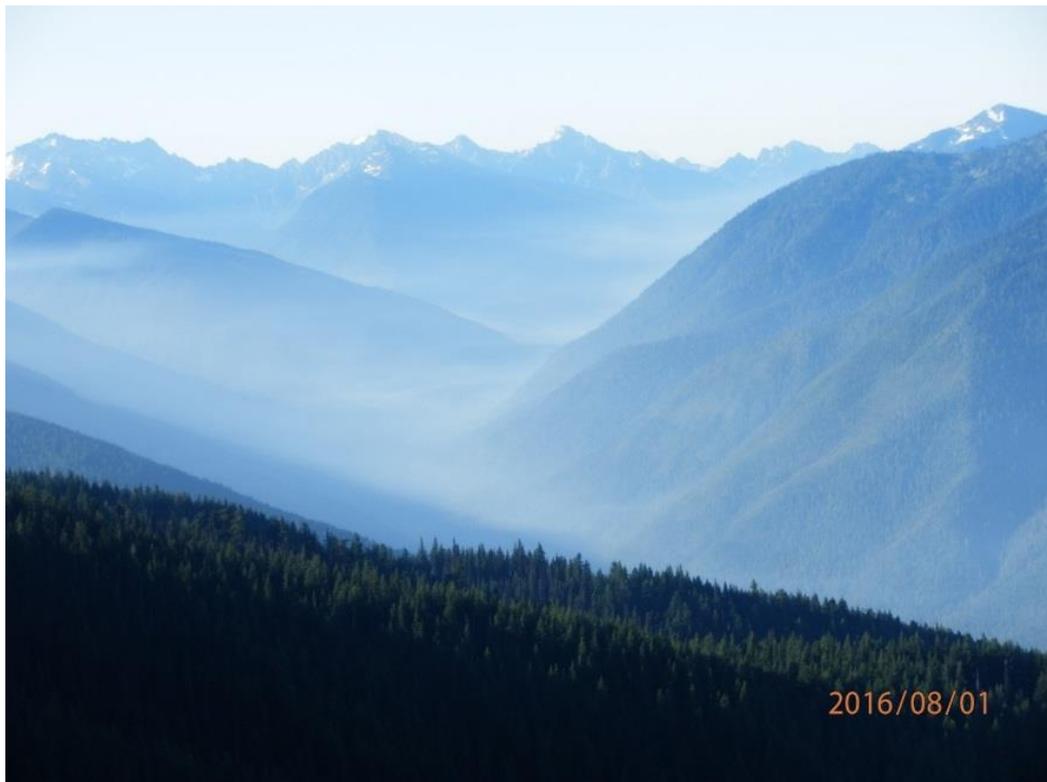


我々は外来種の害獣？



ハリケーン・ヒルの由来

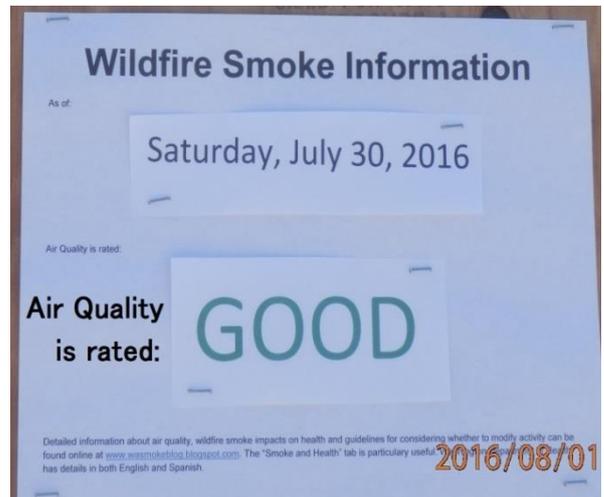
下山の折、オリンピック連山が薄墨のように霞み、薄い層雲が棚引いていたので、Carolyn ネエちゃんに貴国ではあのような雲を何雲というのかと聞いてみたら、あれは雲ではなく、先日発生した山火事の煙であると教えてくれた。山火事の原因は全て落雷だそうだ。只今この山域では3箇所が山火事で燃えている最中であるとのこと。山火事は森林再生のきっかけでもあるので消火などは行わず、煙などのウォッチだけを行っているそうだ。山火事は10月頃まで燃え続けるとのこと。何とも広大なアメリカらしい。このトレイルでも各所で立ち枯れ山が見えたが、これらも全て過去の山火事の跡であった。



(山火事の煙棚引くオリンピック山塊エルワ溪谷、中央のピラミッドは Mt. Anderson2231m)

帰途、ビジターセンターの掲示を見ると、ちゃんと「山火事情報」が掲出されていて、「山火事は、何千年も続いてきた森林の生態システムの連環であって、そこに暮らしている動物や植物はズットそのような環境の中で生活・進化してきた。従って、山火事に対しても人間が消化活動などの人工の手を加えてはならない」、「今は高温で乾燥している時期なので山火事の勢いは増大の一途を辿るが、やがて秋になって冷湿な気候になれば自然に収まって行く」などと書かれており、また、「本日の山火事煙情報：自然環境及び人体に影響無し」という掲示もあった。

流石、『自然保護の父』、『アメリカ国立公園の開祖』ジョン・ミュアーが輩出した国だけのことはある。“自然”という環境に対する考え方が徹底していることもさりながら、チマチマと小細工を加えないという大らかさがいいではないか。ビジターセンターでは、レンジャーがガイド・ツアーをやっていたが、参加者はほんの数人だけと言う長閑さであった。



このオリンピック半島での3日間のハイキングは、山登りという範疇からは外れていたが、豊かでありのままの大自然に浸れた旅であった。

—— (補記) ——

(1) Carolyn ネエちゃんのガイド会社 Experience Olympic LLC (Port Angeles, WA)

URL: <http://experienceolympic.com/>

(ご参考) 今回のガイド料金=車、軽昼食付で3日間5人分合計 US\$1,500 (チップ別途)

(2) 各トレイルの情報 (距離、登高標高差、コース状況の順)

- ①Hall of Mosses Trail (Hoh Rain Forest) 1.3km ループ、30m、山道散策コース
- ②Cape Flattery 2.5km ラウンド・トリップ、60m、海岸断崖上の山道散策コース
- ③Hurricane Hill 5.1km ラウンド・トリップ、210m、稜線山道コース (展望良)

(3) Olympic National Park, Olympic National Forest、同 trail 等の関係情報源

■Olympic National Park 公式 HP サイト <https://www.nps.gov/olymp/index.htm>

■Olympic National Forest 公式 HP サイト <http://www.fs.usda.gov/olympic>

(註) ②の Cape Flattery はオリンピック国立公園内のトレイルではなく、Olympic National Forest という農務省管轄下にある森林公園のトレイルである。

米国の自然公園には、内務省管轄の National Park と農務省管轄の National Forest がある。

■Washington Trails Association HP サイト <http://www.wta.org/go-hiking/hikes/>

米国ワシントン州内の約 4,000 トレイルの案内情報が掲載されている。



(オリンピック国立公園のパフレット<部分>)

Olympic National Park
Washington

National Park Service
U.S. Department of the Interior



(本稿 完)

[⇒「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)